



目次

- 「黒い雨」学習会
- IPPNW第23回大会報告会
- 信州・戦争展に出展します！
- 反核おはなし会、始めました
- 「反核平和への思い」vol.2

講師の山地恭子さん



「黒い雨」学習会を開催しました

9/20(水)に黒い雨学習会を長野県民医連との共催で行いました。講師に広島文教大学准教授で元広島共立病院 医療福祉相談室MSWの山地恭子さんをお招きし、病院会場や個人参加など合わせて40名が参加。この企画は、広島で黒い雨を浴びた方に被爆者健康手帳の交付が認められ、長野県でも病院・診療所で申請があった場合に適切に対応ができるようにという思いで開催しました。企画の様子を当会のメンバーで県内で働く看護師の宇井さんに寄稿していただきました。



最初に広島訴訟のお話がありました。1976年広島で第一種健康診断受診者事業が始まりました。この対象は、実際に黒い雨が降った地域より狭い範囲でした。さらに、小雨地域の指定もあるにも関わらず、大雨が降った地域にしか該当されませんでした。同じ村にいても対象にならない方もおり、分断の原因になりました。1989年に再度黒い雨が降った地域の調査が行われ、以前より広範囲で降ったと証明されました。広島は、国に黒い雨の範囲拡大を求めますが、叶いませんでした。闘いの末、2015年黒い雨裁判を提訴し、2021年勝訴しました。しかし、黒い雨の手帳は、特定の11疾病を有する方にしか適応されず、疾病が無いと手帳を受け取ることすらできない為、医師の診断書も必要になります。また当事者は、この年には殆どが亡くなられていました。私は、様々なところで苦しめられて来た当事者にとって、いたたまれない事実だと感じました。

次に申請支援のお話がありました。黒い雨の手帳の対象者は、高齢の為、書類を自分で書ける方は殆どおらず、支援が必要です。申請の際は、当時どこに入市していたかの戸籍も必要になります。当時は、被爆者に対する差別があり、女性の場合、結婚や交際時不利になってしまう為、隠して生きてこられた方や、入市している事実すらない方もいるとのことでした。中には、同じ場所にいた兄弟間でも手帳を所持している人や所持していない人が存在します。以前ご講演いただいた秋林先生のジェンダーと安全保障にもリンクする内容であり、被爆者もジェンダーの問題で大変な思いをしたことを学ぶことができました。

黒い雨

原爆が爆発したあと、上昇気流によって巻き上げられた放射性物質を含む塵などが混じった黒い雨が降りました。雨を浴びた人が被ばくしたほか、呼吸する際や、水や食べ物を通じて、放射性物質が体の中に取り込まれたと考えられています。広島では「黒い雨訴訟」を経て、国が定める推定降雨域が広がりました。さらに黒い雨にあった方は健康診断のみが対象となる「第一種健康診断受診者証」しか交付されていませんでしたが、「被爆者健康手帳」の申請ができることになりました。

IPPNW 第23回世界大会 IN ケニア 報告会

～世界と協力するとできること～



4月にケニア・モンパサで開催されたIPPNW第23回世界大会。実際に現地で参加した当会のメンバーである松久凌大さん（秋田大学3年生）をゲストにお呼びして8/16に報告会を開催しました。報告会の様子を当会のメンバー、医師の成本さんに寄稿してもらいました。

~~~~~

報告会は、ZOOM・現地参加で17人の方が参加しました。会場の松本協立病院には、仕事後のさまざまな職種のかたが会場に足を運びました。

IPPNWの世界大会は隔年で開かれていましたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、6年ぶりに2023年4月ケニア・モンパサでの開催となりました。松久さんは会議での発言を取り上げるかたちで「気候変動と核兵器は地球上の生命にとって二つの存亡の危機である。両者は、その内情と相互に補強し合うことからTwin existential threatsと呼ばれている」と説明し、核兵器が地球の存続を脅かしており、核兵器廃絶が緊急の課題であることを強調しました。実際に、核兵器は、製造の段階からすでに多くのウラン採掘国の国民の健康を損なっており、また、その健康被害を特に強く受けるのは女性であるということも、議論に上ったと言います。

また、松久さんは日本国内の核兵器を取り巻く現状についても考察し、日本国内での核兵器廃絶の足並みがそろわない背景として、今なお医師会などの原発政策推進派の力が根強いことを指摘しました。今後は核兵器のデメリットを強調するだけでなく、反核兵器の方針が持つメリットを強調していくべきではないかと反核運動自体の展望についても言及しました。

IPPNW開催地、ケニアの熱気が会場にも伝わるような松久さんの発表を聴き、参加者からもさまざまな質問や意見が出ました。日本の核兵器に対する言動は海外からどのように評価されているかとの質問に対し、松久さんは「各国の参加者への日本の核兵器に対する姿勢についての興味関心は非常に高く、なぜ核兵器禁止条約に参加しないのか、被爆の証言を世界に発信しないのか、と日本の歴史や現在の外交について質問攻めにあつた」と話していました。他にも、核兵器はなくてはならないという意見の人に、根拠をもって反対できなかったことが今回の講演を聞いてさらに悔しいと思ったという参加者のエピソードが聞かれるなど、活発な意見交換が行われました。

ウクライナとロシアの情勢や日本の軍拡政策のため、核兵器への疑問や関心が高まっている状況で、世界の中の日本として、核兵器廃絶のために何ができるかを考える時間となりました。



## IPPNW

（核戦争防止国際医師会議）

IPPNWはInternational Physicians for the Prevention of Nuclear Warの略語で、日本語では核戦争防止国際医師会議です。全ての核兵器の廃絶のために声を上げる医師・医学生からなる国際組織であり、1980年に発足しました。Global Healthの観点から軍縮・気候危機など幅広い問題に取り組んでいます。





# 「平和のための信州・戦争展」に出展します

11/3(金)4(土)5(日)に「第34回平和のための信州・戦争展in松本」が開催されます。戦争をなくし、平和をもとめる団体・市民があつまりさまざまな講演会や展示などの企画を行う予定です。

今年は長野反核医療者の会も参加して主に以下の展示と企画をおこないます。「核兵器をめぐる今の情勢はどうなっているの?」「核をなくし平和をつくっていくために自分たちにできることは?」など、一緒に学び考え、そして実際に行動できる!そんなブースと企画にする予定ですのでお楽しみに♪ぜひ多くの方に足を運んでいただけたら嬉しいです。

## ブース

## 日本政府に核兵器禁止条約への参加を呼びかける おてがみアクション!



長野反核医療者の会のメンバーと一緒に声を届けよう!

1. 自分の思いを手紙に書く
2. 総理、外務省にFax/Mail
3. 自由にデコろう!
4. 壁にかざろう!

2023/11/4 10-12・14-16時 | 11/5 10-12時

平和のための信州戦争展  
場所: 松本市勤労者福祉センター

日本政府に核兵器禁止条約への参加を呼びかける~

核兵器禁止条約第2回締約国会議は、11月27日~12月1日に、アメリカのニューヨークで開催されます。それまでに間に合うように、戦争展に参加する私たちの思いを「おてがみ」にしたため、内閣総理大臣や外務省宛てにFAXで送ります。さらに、その「おてがみ」を壁に掲載して、自由に飾りつけます!



## 企画

## 平和の種をまく会×長野反核医療者の会 平和の花を咲かせるおはなし会



平和の種をまく会・長野反核医療者の会 合同企画

### 平和の花を咲かせるおはなし会

2023/11/5 13:00-15:00  
松本市勤労者福祉センター 2-1会議室

県内で反核平和活動をしている2団体が世代を超えて語り合います。  
戦争や抑圧のない未来のためにできることを一緒に考えましょう!

<内容>  
RECNA中村桂子さん講演会ビデオ(2023年6月のもの)上映  
座談会(原爆の絵本、核兵器の今、被ばく者への思い etc...)

「平和の種をまく会」は、2006年から長野県内で平和のための文化活動(ニュースレター「平和の種」の発行や講演会、映画上映など)を続けています。

この素敵な大先輩たちと、まだ生まれたばかりの長野反核メンバーで平和の話をしたら楽しそう!人前で話せないメンバーも、座談会であれば少し肩の力を抜いて思いを表現できるかも...!?当日は、原爆の絵本、被爆者への聞き取り活動の紹介そして、核兵器の今についての講演会(録画)上映があります。平和の話の花を咲かせに、是非いらしてください!

# 反核メンバーおはなし会 始めました



「長野反核医療者の会のメンバーで交流したい！」というメンバーの提案で10月からおはなし会を始めました。初回は10/6(金)にZOOMで開催し、7人が参加。サーロー節子さんの著書『光に向かって這っていけ』をみんなで読み合わせしながら核兵器・戦争・平和をとりまくさまざまな話題で交流しました。参加したメンバーから出された話題と感想を以下で紹介します。今後もゆるく楽しく継続していく予定です。興味を持った方はぜひ参加してみてくださいね。

医療・介護・福祉関係者は、科学的に核兵器による人体への影響について語ることができるという面だけではなく、人生に伴奏していく立場であるという面からも、自分たちが反核活動に向いてる！という気づきがあり、みんな元気になりました。

ALPS処理水放出がされていますが、安全だというパフォーマンスのために小泉進次郎氏が福島でサーフィンイベントを視察したり魚を食べたりしたニュースについて。

賞賛の声もあるようですが、メンバー内では批判の声しかありませんでした。パフォーマンスのために数回訪れることと、日常的にそこで生活し生計を立てていることは全く違う意味を持ち、日常の重みを軽視する行動だとも思いました。またパフォーマンスの是非についての議論にみんなが飛びつくことで、地元の不安や原発政策の進め方、安全性など本当に考えなければいけないことが見えなくなってしまうと思います。

サーローさんの著作を読んで、医療関係者が核問題に与えるインパクトの大きさを認識することができました。ICANの母体が医療者集団のIPPNWだったことなど、ブログの中でも知らないことが多々ありました。

日本では人権が法律で規定されていないという話に。人権もですが、核兵器に関しても日本の国内法では規定がないことは、案外盲点かも。非核三「原則」はありますが、法律はない状況で、法学の世界では非核を法律に持ち込むための活動が行われているそうです。人権の法制化とあわせて、ひとりひとりの人生を守るための過程が、領域を横断して展開していることには、私たちも希望をもらえることだと思います。

『光に向かって這っていけ』は、一通り読んだのですが、皆さんの感想を聞いて「気づかなかった！」ということや「わたしもそう思った！」ということがあってさらに深まりました。反核平和・医療に対するみんなの想いにも繋がってとても貴重な時間でした。

## サーロー節子さん 「光に向かって 這っていけ」

サーロー節子さんは、広島出身でカナダ在住の被爆者・反核運動家です。13歳中学1年生の時に爆心地から1.8kmの場所で被爆し、建物の下敷きになりましたが「諦めるな！光に向かって這って行け」という暗闇の中で聞いた声と差し込んできた光を信じ、逃げ出して生き延びました。大学卒業後、アメリカに留学し、結婚を機に移り住んだカナダでソーシャルワーカーになりました。カナダを拠点に世界各国で被爆体験を語り、核兵器廃絶を訴えています。

2017年には国連で核兵器禁止条約が採択され、同じ年にICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）がノーベル平和賞を受賞した際には被爆者として初めて授賞式でスピーチを行いました。

核なき世界を追い求めて  
光に向かって這っていけ



サーロー節子  
金崎由美

岩波書店

光に向かって這っていけ  
核なき世界を追い求めて  
サーロー節子 著 金崎由美 著  
(岩波書店 2019年刊)

## 「反核平和への思い」VOL.2



生活を守るために

何が必要か考えた。

会員の皆さんの「社会情勢に対して思うこと」や「これまでの経験」などを紹介していきます。会員同士がお互いを知る場になりますように。

お名前 ( 丸橋 郁弥 )

所属・職種など ( 事務 介護工 )